

大阪方言の助動詞「ヤル」の 使用条件について

村 中 淑 子

1. は じ め に

大阪方言を特徴づける言語項目の一つとして、助動詞のヤルがある。また、類似の方言助動詞として、ハル・ヨルがある。次に例を挙げる。

太郎さんが行きハル／行かハル

太郎ちゃんが行きヤル

太郎が行きヨル

すなわち、それぞれの助動詞が接続する動詞の動作主体に対して、話し手がどのように待遇を行うか、ということを明示する形式が、ハル・ヤル・ヨルである。ごく大まかに言えば、ハルは軽い敬意、ヤルは親しみ、ヨルは軽い見下げを表す。

大阪ではハル・ヤル・ヨルが上記のように使い分けられているようであるが、ハル・ヨルが大阪以外の近畿方言地域においても使われているのとは異なり、ヤルの使用地域は、大阪を中心としたやや狭い地域に限られているようである¹⁾。

* 本学国際教養学部

キーワード：大阪方言，ヤル，待遇表現，小説，談話資料

本稿では、このヤル（現代日本語における大阪方言の助動詞ヤル、以下本稿では基本的にヤルとのみ呼ぶことにする）の使われかたについて検討を行う。以下、2.1 では、大阪方言概説におけるヤルの意味用法記述を確認する。2.2 では、先行研究における質問紙調査の結果から、ヤルの使用状況を確認する。2.3 では、近畿中央部方言の待遇表現に関する論文から、ヤルの待遇表現体系上の位置づけについて確認する。2.4 で、2.1～2.3 から導きだせるヤルの運用ルールをまとめる。3では、既存の談話資料および小説資料におけるヤルの出現状況を見る。4では、ヤルの使用を制限する条件についての仮説を提示する。

2. 先行研究におけるヤル

2.1 大阪方言概説におけるヤル

大阪方言についての概説書および大阪方言の事典から、年代順に、ヤルに関する記述を抜き出していく。なお、それぞれの引用の原著に音の高低の印が付してある場合、以下ではその高低の印をすべて省略している（本稿ではアクセント・イントネーションについては扱わない）。また、見やすさのため、行替えを省略したものもある。

まず、前田勇1949では、次のように述べられている（旧字体は新字体に、旧仮名遣いは現行仮名遣いに直した）。

男子青少年が「よる」を用いれば、女子青少年は恰もその向うを張
るかの如く 買いやる（四） 起きやる（上一） 寝やる（下一）

来やる（カ変） しやる（サ変） と云う。この「やる」は

やくたいもない事をしやる。 —聖遊郭—

みつ様聞てみやらんか。 —短華薬葉—²⁾

など云った昔の「やる」と同じく、「ある」と云う敬語の訛ったもの

大阪方言の助動詞「ヤル」の使用条件について

かと思うが、用法は異なる。すなわち昔のは第二人者（対者）の動作に用いたのであるが、今日のは第三者（他者）の動作に用いるのである。

牧村史陽1955（＝牧村1979）では、次のようである³⁾。

おる〔居る〕の転訛であろう。（婦人語）

例 いヤル・行きヤル・書きヤル（いおる・行きおる・書きおるの意）。
一方、男子の語としては、これが、居よる・行きよる・書きよるとなる。

牧村1955ではこの後に続けて近松出典の例文が載せられているが、省略する。

和田実1961では、次の通りである。

女専用の、親愛とでもいうべき助動詞。和田サン自分デ書キヤッタンヤロカは、書キハッタのような尊敬でなくて「書いたんだろうか」と訳すほかないが、書イタンヤロカよりも和田サンを親しく扱っている。

榎垣実1962では、次のように述べられている。

アルを形式動詞として使うことは共通語にもみられるし、紀伊では書きアルと動作態表現に使うが、大阪を中心としてこのアルがヤルの形で助動詞的に使われ、敬意とまではいかなくとも、親愛感を表わす。

書きヤル 見ヤル 来ヤル シヤル

これが動作態表現や他の敬語助動詞と違う点は、原則的に第三者で

ある人間の動作・状態を示す動詞にだけしか接続しない点で、したがって命令形がない。よほど特殊なものであり、その点で、書きヨル ミヨル キヨル シヨルと使うヨルと用法が一致するが、このヨルは多少見下げた語感を伴うし、人間でなくとも望ましくない現象に対しては、アメ降りヨッタ。押シテモ動キヨラヘン。と使う点が違う。このヨルは中近畿で広く使うのに、ヤルは大阪市とその周辺だけで、主として若い婦人が使う。

山本俊治1962では、次のようである。

女子ことばにあって、ヤハル・ハルより待遇度が下がると、ヤル・ヤを用いる。

オウチニ イヤル。(女子大生)(おうちにいらっしゃる)

ニーチャン キョー キーヤ ワ(母→子)(兄ちゃんが今日いらっしゃるよ)

これは「～ある→ヤル→ヤ」と推移したものであろう。待遇度はあまり高くないが(したがって、主として第三者の言動に対して用い、相手に対しては、ヤハル・ハルが殆どである)、しかし、やわらかな感じのする言い方である。

郡史郎1997では、「敬意をこめないための言い方」として、ヨルの説明の後に、ヤルについて次のように記されている。

第三者の行為を表す言い方には、主に女性が使う「…シヤル」もある。これは、その人に親近感がある場合に言う表現で、大阪だけの言い方である。

大阪方言の助動詞「ヤル」の使用条件について

例：アノコ ハワイ イッテキヤッテンテ

(あの子ハワイへ行ってきたんだって：親愛・女)

以上の、方言概説書および辞典の記述をまとめると、第1表のようになる⁴⁾。

第1表 概説におけるヤル記述のまとめ

	概説内容	概説の筆者
①使用地域	大阪	榎垣1962, 郡1997
②使用者層	若い女性	前田1949, 榎垣1962
	女性	牧村1955, 和田1961, 山本1962, 郡1997
③待遇の対象	第三者待遇のみ使用可 対者待遇には使用不可	前田1949, 榎垣1962, 山本1962, 郡1997
④待遇の高さ	敬意とまではいかない	榎垣1962
	ハル・ヤハルより低い	山本1962
	敬意をこめない	郡1997
⑤待遇の性質	親愛, 親近感	和田1961, 榎垣1962, 郡1997
	やわらかな感じ	山本1962

すなわち、大阪方言の概説書によれば、ヤルは、「大阪で、若い層を中心とした女性が、第三者待遇専用の助動詞として、あまり敬意を示さず親愛の情を示すときに用いるもの」とまとめることができる。

2.2 方言調査結果におけるヤル

本節では、先行研究における質問調査票調査の結果から、ヤルの使用状況を見る。

宮治弘明1987に、大阪府生え抜きの高校生を対象とした調査の結果が示されている。動詞は「行く」である。ヤルが出現する場合を○, 出現しない場合を×, としてまとめたのが第2表である⁵⁾。

第2表 宮治1987における大阪府高校生のヤル待遇の対象

待遇の対象	近所の年上	父親	近所の年下	弟か妹
対者待遇	×	×	×	×
第三者待遇	×	×	○	○

(話し相手としては母親を設定。調査実施は1986年)

岸江信介・中井精一1994『京都～大阪間方言グロットグラム』(調査は1989～1992)には、京都・大阪間のヤルの分布が載せられており(質問文:「あの子、今日、一人で行きヤンねん」というように、「いきヤンねん」という言い方をすることがありますか。「行きヤル」とも言いますか。),大阪府と京都府の境で使用・不使用がほぼ分かれていることがわかる。また、使用の年齢層については、枚方市・茨木市・摂津市・吹田市の北部・大阪市等では若年層から老年層まで広くヤルの使用が認められるが、高槻市・豊中市などでは若年層から中年層までに偏っている。

岸江信介・中井精一・鳥谷善史2001『大阪府言語地図』には、動詞「来る」について、「対者待遇／第三者待遇」と「目上／同等／目下」を組み合わせた6項目の待遇表現の調査結果が掲載されている。ヤルが出現する場合を○,出現しない場合を×,として6項目の結果をまとめると第3表の通りである。

第3表 岸江・中井・鳥谷2001におけるヤル待遇の対象

	目上 (学校の校長)	同等 (親しい幼なじみ)	目下 (近所の中学生)
対者待遇	×	×	×
第三者待遇	×	○	○

(調査実施は1998年。話者は各地生え抜きの70歳以上)

大阪方言の助動詞「ヤル」の使用条件について

すなわち、6種類の項目のうち、「対者待遇・目上」「対者待遇・同等」「対者待遇・目下」「第三者待遇・目上」の4項目の地図には、ヤルがまったく見当たらない（「目上」でキャーッタがあるが、これは「来る＋ハル＋タ」がキハッター→キャハッター→キャーッタと転訛したものであり、ヤルの変形ではないと思われる）。

一方、「第三者待遇・同等」と「第三者待遇・目下」の2項目の地図には、ヤルが出現した。その分布は、枚方市・寝屋川市・吹田市・豊中市・大阪市・東大阪市・大東市・堺市にわたる。いわゆる摂津方言および北・中河内方言の地域である。話者の性別を調べてみると、ヤルの使用者は女性が多かったが、約4分の1は男性が占めていた。

次に、田原広史・村中淑子2002の東大阪市調査の結果を紹介する。調査対象は東大阪市生え抜きの20代から60代までの男女計54名、調査実施は1998年である。

「「あそこの子、今度、アメリカ行きやるねんて。うらやましいわぁ」のようなヤルを使うかどうか」という質問について、女性の8割、男性の5割強が「使う」と回答した。年代別にみると、「使う」という回答は20代・30代で8割を超えており、40代で約7割、50代で5割強、60代で25%であった。これらは「使う」の回答者率であり、「たまに使う」を含めると、さらに数値は増える。

もうひとつ、田原・村中2002では、「車／近所の子／犬／先生／大勢の人」をそれぞれ第三者待遇の対象とし、「走っ　テハル／タハル／テル／テヤル／トル／テヤガル／テクサル」を選択肢とする調査も行った。ヤルは「近所の子」を対象としたときに4割近く出現し、「先生」を対象としたときはゼロであった。20代では「犬」や「大勢の人」について約15%、「車」についても8%、ヤルが出現した。

以上の結果をまとめると、2-1 の第 1 表の①～⑤のうち、

「①使用地域：大阪」は、「摂津方言および北・中河内方言の地域」であるといえる。

「②使用者：若い女性，あるいは女性。」については，岸江・中井1994，岸江・中井・鳥谷2001，および田原・村中2002より，必ずしも使用者は女性に限らないこと，また若年層に限らないこと，がわかる（時代が下るにつれて使用者層が広がった可能性もある）。

「③待遇の対象：第三者待遇のみ使用可」はいずれの調査によってもほぼ例外がなく，明らかである。

「④待遇の高さ」をみるために，3種の調査の結果を第4表にまとめた。ヤルの待遇の高さについては，「同等もしくは目下を待遇できる」とみてよいだろう。

第4表 3種の調査からみるヤルの待遇価

調査論文	調査対象	調査年	ヤルで待遇が可能な動作主体
宮治1987	高校生	1986	目上× 目下○
岸江・中井・鳥谷2001	70歳以上	1998	目上× 同等○ 目下○
田原・村中2002	20代～60代	1998	目上× 目下○（20代では，犬・不特定多数・車も○）

「⑤待遇の性質」については，これらの調査からは明らかでない。

2.3 待遇表現論文におけるヤル

本節では，ヤルを待遇表現体系の中で位置づけている論文を2つ，挙げる。

岸江1998は，京都方言のハル・ヨルおよび大阪方言のハル・ヨル・ヤルについて，尊敬語・軽卑語と親愛語の枠組みから体系づけている。待遇表

大阪方言の助動詞「ヤル」の使用条件について

現の使い分けの決め手として、上下関係と親疎関係のほかに、親愛・非親愛の関係の軸が作用するのが京阪の代表的な待遇表現ハル・ヨル・ヤルの特色である、と述べている。その中で、ヤルについては、親愛語的用法と軽卑語的用法とがあるという。親愛語的用法の根拠としては、大阪市における調査の結果として、「隣の赤ちゃん／お猿さん／隣の猫／隣の子猫／隣の子犬」を待遇対象としてヤルが使われるという結果を示している。また、軽卑語的用法としては、「(自分の亭主を指して) おっさん、また遊びに行きヤルわ。」「あの男、また間違いヤったわ。」といった発言が観察されることを記している。

中井2002は、畿内型待遇表現においては、話題とする第三者に関する、社会的に定まった上下軸の評価よりも、話し手がその第三者に対して持つ認識・評価・感情が優先される、という特質があることを述べたものであり、ハル・ヨル・ヤルの使用と評価・感情との関係が位置づけられている。ヤルについては、「女性の話し手が」「プラスの評価もしくはプラスの感情を持つ人物」かつ「目上ではなく同輩である人物」を待遇するときに使うものとされている。

以上の2つの論文においては、待遇の対象となる人物に、話し手がどのような感情を持っているかが、ヤル使用のカギとなることが示されている。これは2-1の第1表でまとめた①～⑤のうち、⑤を掘り下げたものととらえることができる。すなわち、待遇の高さのみでは計りきれない待遇の性質について詳しく検討されているのである。

2.4 先行研究におけるヤルのまとめ

2.2と2.3を総合すると、2.1の第1表を次の第5表のように修正することができる。

すなわち、先行研究によれば、ヤルは、「摂津方言および北・中河内方

第5表 先行研究から導くヤルの運用ルール

①使用地域	大阪（摂津方言域および北・中河内方言域）
②使用者層	多くの女性と一部の男性が使用（調査データをみると決して女性専用語ではない）。 多くの若年層と一部の中高年層が使用（調査データをみると決して若者専用語ではない）。
③待遇の対象	第三者待遇のみ使用可能。対者待遇には使用不可。
④待遇の高さ	同等もしくは目下を待遇する。 （若年層においては動物にも可。車などの非情物にも可か。）
⑤待遇の性質	親愛語としての機能あり。軽卑語としても使用可能。

言で、若年層女性を中心とする全ての層の話者が、同等もしくは目下への第三者待遇専用の表現として、親愛の情もしくは軽卑の情を示すときに用いるもの」とまとめることができる。

3. 談話資料および小説資料におけるヤル

3.1 談話資料におけるヤル

真田信治・井上文子・高木千恵1999は、関西圏での若年層における談話の文字化データをおさめたものである。談話ごとの話者情報と収録年月をまとめると第6表の通りである（話者情報については、言語形成期以外の居住歴を省き、簡略化した）。

これらの談話の中で、ヤルは、談話1の話者Aの発話に、3カ所出現している。下記にその3カ所を引用する（ヤルに下線を施したのは本稿筆者）。

37A：私の友達なんか、むっちゃ、小学校5年生ん時ん転校しやってんやん

41A：一人っ子やから買いやってん。一年間だけやけどな。

45A：すんげー怒ってやったで。

大阪方言の助動詞「ヤル」の使用条件について

第6表 真田・井上・高木1999の談話の話者情報と収録年月

	話者A	話者B	収録年月
談話1	20歳女性, 大阪府枚方市	20歳女性, 大阪府枚方市	1993年9月
談話2	20歳女性, 大阪府箕面市→兵庫県川辺郡	20歳女性, 兵庫県尼崎市	1993年9月
談話3	19歳女性, 兵庫県宝塚市	20歳女性, 大阪市	1993年9月
談話4	20歳女性, 兵庫県神戸市	20歳女性, 兵庫県神戸市	1993年9月
談話5	19歳女性, 奈良県	20歳女性, 奈良県	1996年2月
談話6	22歳男性, 京都府久世郡	22歳男性, 大阪府大阪市	1996年1月
談話7	22歳男性, 愛媛県松山市→広島県広島市→奈良県奈良市	大阪府枚方市	1996年1月
談話8	21歳男性, 大阪府	21歳男性, 大阪府	1996年1月
談話9	22歳男性, 大阪府	23歳男性, 大阪府東大阪市	1996年1月
談話10	21歳男性, 兵庫県姫路市	21歳男性, 兵庫県姫路市	1996年1月
談話11	22歳男性, 愛媛県松山市→広島県広島市→奈良県奈良市 (談話7のAと同一人物)	21歳男性, 奈良県奈良市	1996年2月

待遇の対象は3カ所とも同一人物であり, 話し手Aの友人(その場にはいない)である。制服に関する思い出を語っている中で, 友人の制服に関する昔のエピソードを披露している場面である。

この談話資料の話者は延べ22人, 同一人物が2談話に出てくるので異なりが21人となる。21人のうち, ヤルを使う地域(摂津方言域および北・中河内方言域)で言語形成期を送っているのは少なく見積もっても6人である(談話1のAとB, 談話3のB, 談話6のB, 談話7のB, 談話9のB)⁶⁾。

この6人の話者が, 談話の中で「同等もしくは目下」の人物を「第三者待遇」で言及している箇所はいくつかある。しかしヤル使用がみられたのは上に挙げた3カ所だけであった。

3.2 小説資料におけるヤル

八亀裕美・木岡智子2003は、大阪方言が使用されている小説およびエッセイの会話文から、存在表現・ハル・トル・ヨル・ヤル等を含む文を抜き出して、データ集の形にまとめられたものである。

データ集の元になった小説・エッセイは、岩阪恵子1993『淀川にちかい町から』講談社文芸文庫、黒岩重吾1986（文庫化年）『さらば星座』第二部(1)・第二部(3)集英社文庫、佐藤愛子1996『結構なファミリー』集英社文庫、東野圭吾1988『浪花少年探偵団』講談社文庫、東野圭吾1993『しのぶセンセにさよなら』講談社文庫、東野圭吾1998（文庫化年）『あのころぼくらはアホでした』集英社文庫、三田誠広1979『高校時代』角川文庫、山崎豊子1960『ぼんち』新潮文庫、の9冊とのことである。

抜き出されている形式の数は、次の通りである。丁寧形と普通形の数をそれぞれカッコの中に示した。元データでは肯定形と否定形を区別しているが、ここでは区別せず、合計数を示した。

・存在表現

アル（丁寧形1 普通形5）、イタ（丁寧形5 普通形31）、イテタ（普通形2）、イテハッタ（丁寧形3 普通形3）、イテハル（丁寧形3 普通形3）、イテル（丁寧形4 普通形5）、イハッタ（丁寧形1）、イハル（丁寧形4 普通形3）、イル（丁寧形20 普通形42）、オッタ（丁寧形5 普通形41）、オル（丁寧形14 普通形131）、その他（丁寧形10 普通形5）、居る（丁寧形2 普通形101）

・「シヨル・シトル」とその関連表現

シオッタ（普通形1）、シテオル（普通形5）シトッタ（丁寧形8 普通形139）シトル（丁寧形8 普通形381）シヨッタ（丁寧形2 普通形53）シヨル（丁寧形1 普通形90）その他（普通形1）

・「シテハル・シヤル」とその関連表現

大阪方言の助動詞「ヤル」の使用条件について

シテハッタ（丁寧形25普通形31）シテハル（丁寧形65普通形69）

シヤル（普通形1）その他（普通形4）

上で示した通り、このデータ集にはシヤルが1つ、取り出されていた。シヤッタは挙げられていない。次に、このシヤルの用例をデータ集からそのまま抜き出す。

ぼんち 525頁 「ふう、ふう、ふう、ふう、うまいことお云いやるわ、商い蔵は男のもの、衣装蔵（いしょうぐら）や、家屋敷にはわてらの血が沁み込んでおますわ（後略）」

シヤルの項目は、「動詞の連用形＋ヤル」の形を抜き出す意図で挙げられたものと思われるが、上記の例は「オ＋動詞の連用形＋ヤル」の形になっている。とすれば、「動詞の連用形＋ヤル」の形はじつは0であったということになる。また、原典の『ぼんち』をみると、この「お云いやる」は対者待遇であることから、本稿で扱っているヤルとは異なるものであることがわかる。

ヤルのつきうる形としては、「動詞の連用形＋ヤル」以外に、「動詞のテ形＋ヤル」がありうるが、シテヤル・シテヤッタは項目としてあげられなかったようである。存在表現についても、可能性としてはイヤル・イヤッタ、イテヤル・イテヤッタがありうるが、データ集にはあげられていない。

イタの普通形が³31、イルの普通形が³42、オッタの普通形が³41、オルの普通形が³131、居るの普通形が³101、シトッタの普通形が³139、シトルの普通形が³381、シヨッタの普通形が³53、シヨルの普通形が³90、という出現数と比較して、イヤル・イヤッタ・イテヤル・イテヤッタ・シヤル・シヤッタ・シテヤル・シテヤッタが0であるとすれば、この出現頻度の低さは注目に

値すると思われる⁷⁾。

4. ヤルの使用を制限する条件についての仮説

大阪方言の談話資料および大阪方言の小説を用いたデータ集をみると、ヤルの出現頻度が著しく低い、ということがわかった。

この出現頻度の低さから、本稿 2.4 の第 5 表の条件を満たしているだけでは、必ずしもヤルが使われないのではないかと推測される。すなわち、第 5 表に挙げた項目は、必要条件ではあっても、十分条件ではないのではないか。

2.3 で見たとおり、岸江1998が、ヤルについて親愛語的用法と軽卑語的用法の両方をもつことを指摘しており、このことがヤルの使用制限とかかわっていると思われるのだが、本稿では少し観点を変えた提案をしたい。すなわち、本稿では、「ヤルは、話し手が親しい聞き手に対して、自分だけが知っているエピソードを打ち明け話として感情を込めて語る、という文脈で使われる傾向がある」という仮説を提示する。

これは、西尾純二2005がヨルについて述べている、「使用することで発話に情意性が生じる」と共通するものであるともいえる。さらにいえば、西尾2005の「事態に対する何らかの評価が存在し、その評価が対象（動作主や描写対象）にむけられた時点で、送り手の待遇表現行動は開始していると考え」という主張に注目し、「待遇表現の産出のプロセスを考慮することによって、ヨルという待遇表現形式の表現性はより詳細な分析が可能になる」という考えを、ヤルに応用したものである。

さかのぼれば、中井2002の「感情の入れ込みをするか否かというスイッチの切り替えにより、（中略）素材待遇語の選択がなされる待遇表現運用法」という記述とも、発想としては一致し、さらにさかのぼれば、宮治1988・1996の、「関係把握の表現」に関する記述も参考としている。

大阪方言の助動詞「ヤル」の使用条件について

ただし、本稿で主張したいヤルの情意性は、待遇対象への認識・評価・感情にとどまるものではなく、その発話が発せられる会話場面において聞き手との関係をどのように表示するか、および、話し手が聞き手にたいしてどのように自分の語りを展開しようとしているか、という話し手の態度に関するものである。

小説やエッセイの会話文に出現するヤルの例を用いて説明する（以下、下線は本稿筆者が付したものである）。

(1) 「美々はゴロちゃんにえらそうにしてるの？」

私は笑いながらいった。

「そらやん。ゴロちゃん、まゆみのためにあたしに頭あがらへんもん。まゆみが生れたときは、鼻の穴ひろげて喜んでやるねん」

もう少し、こうも男の値打を無残に凋落させないよう、女は言葉遣いに気を使うべきなんじゃないかしら。私だって、剛のことを他人にいうときは、もう少し神経を使う。（田辺聖子『私的生活』講談社文庫1981年、44-45頁）

主人公のごく親しい友人である美々が、自分の夫（「ゴロちゃん」）に関するエピソードを主人公に語る場面である。子供が生まれたときの「ゴロちゃん」の喜びようをあげすけに（自慢げにとも受け取れる）語る。夫への愛情と軽侮がないまぜになったセリフを相手に差し出す中に、ヤルが出現する。

(2) 「あたしが友達から聞いた話とは、えらい違うなあ」

こういったのはKさんという女子生徒だった。可愛いので、お近づきになろうと思っていたところだ。「あたしの友達の話では、H中

学ほど悪い学校はないということやったで」(中略)

「A田さんていうねんけど、あんた知ってる？」(中略)

「一学期が終わったら、その子、区役所に駆け込んでいきやったんよ。(中略)

「これどう思う？ 針金やで。(中略) どう思うの、あんた」

Kさんは友人の恨みを晴らすかのようにぼくに迫ってくる。

(東野圭吾『あの頃ぼくらはアホでした』集英社文庫1998年、30-32頁)

主人公の高校の同級生である女子生徒が、自分の友人にまつわるエピソードを、怒りをもって語る場面である。H中学でA田さんがひどい目にあったことに憤慨し、H中学のひどさをぜひ周囲の人々にも知らせたい、納得させたい、という調子のなかで、ヤルが出現する。

ヤルがエピソード語りで出現しやすい、とすれば、ヤルに後接する形式としてネン・タン・テンが出現しやすい、すなわち「のだ」文の形になることと関連するであろう。(1)(2)ともその形になっているが、ほかに次のような例が挙げられる。

(3) <あんた、奈良のお水取りなんか行ってごらんよ。ものすごいしィ。

大体、あれは(中略)女の子ら、宿所の中へははいられへんけど、この練行衆の坊さんらを見にいたり、知り合いになったら差し入れしたりして熱あげてやるねんよ、驚くわ。(後略)>

(田辺聖子『ベッドの思惑』集英社文庫1989年、55頁)

(4) 「ものすごく熱心に迫ってきやんねん。それにヤキモチでねえ。ふ、ふ、ふ、ふ…」

大阪方言の助動詞「ヤル」の使用条件について

(田辺聖子「見さかいもなく」『金魚のうろこ』集英社文庫1996年、34頁)⁸⁾

先行研究であげられている例文にも、これに当てはまるものがある。和田1961の「和田サン自分デ書キヤッタンヤロカ」, 郡1997の「アノコ ハワイ イッテキヤッテンテ」, 岸江・中井1994の調査で用いられた「あの子, 今日, 一人で行きヤンねん」, 田原・村中2002の調査で用いられた「あそこの子, 今度, アメリカ行きやるねんて。うらやましいわあ」がそうである。3.1 でとりあげた談話資料の37A, 41Aのセリフも同様であり, いずれも, 「のだ」文である。(宮治1987の質問文も「〇〇はどこへ行ったのか」であり, 「のだ」文を引き出すものである)。

以上述べてきたように, 「ヤルは, 話し手が親しい聞き手に対して, 自分だけが知っているエピソードを打ち明け話として感情を込めて語る, という文脈で使われる傾向がある」という仮説をたてることにより, ヤルの使用頻度の少なさがある程度説明できるのではないかと考える。この場合に込められる感情は, 喜びであっても怒りであってもかまわない。相手に強く訴えようと頭で考えて発話した, というのではなく, 思わず知らずのうちに感情が出てしまった, というような文脈である。

条件1: 「エピソードを打ち明け話として語る文脈で発話する」ときにヤルを用いる

条件2: 「プラスにせよマイナスにせよ, 話し相手に訴えたい感情が発話に現れる」ときにヤルを用いる

条件3: 「話し手が思わず感情を表してしまうほど話し相手と親しい」ときにヤルを用いる

これらの条件がそろったときにヤルの出現可能性が高まるのではないか。このことがヤルの使用頻度を制限している、と予測する。

5. お わ り に

本稿では、現代日本語における大阪方言の助動詞ヤルに注目し、まず先行研究から、ヤルの意味用法記述の確認、ヤルの使用状況に関する調査結果の観察、ヤルの待遇表現体系上の位置づけの確認、をおこなった。次にそれらから導きだせるヤルの運用ルールをまとめ、それをふまえたうえで、既存の談話資料および小説資料におけるヤルの出現状況をみた。そしてその出現頻度の低さから、ヤルの使用を制限する条件の存在を推測し、仮説を提示した。

すなわち、「ヤルは、話し手が親しい聞き手に対して、自分だけが知っているエピソードを打ち明け話として感情を込めて語る、という文脈で使われる傾向がある」という仮説であり、この仮説は、待遇表現形式の使用に関して、「話し手が自分の語りをどのようにとらえ、どのように相手へ差し出すか」という話し手の態度の観点をとりいれることを提案するものである。

今後、この仮説を検証するために、小説資料および談話資料などを詳細に検討する必要がある。

注

- 1) 榎垣1948によれば、1944年実施の梅花高等女学校4年生対象の調査で兵庫県武庫郡・芦屋市・尼崎市・川辺郡等にもヤルがあることが確認されている（地名は当時のもの）。なお、ヤルについての榎垣の記述は榎垣1948よりも榎垣1962がまとまっているものと考え、本稿2節では榎垣1962をとりあげている。また、榎垣1964には、ヤルについて「下品なことばづかい」という、他にはない記述がある。もしこれが妥当であるとすれば、ヤルの使用頻度の

大阪方言の助動詞「ヤル」の使用条件について

低さと関連が深いと考えられるが、詳しい検討は、稿を改めて行うことにしたい。

- 2) 「聖遊郭」は宝暦7年(1757年)刊, 「短華蘂葉」は天明6年(1786年)序の洒落本。なお、前田のいう「昔の「やる」」については、山崎久之1963・1990等に詳しい。
- 3) 牧村1955と牧村1979のヤルについての記述は、表記、記号、文の順がわずかに異なるのみであるので、ここでは見やすさを考えて1979の字句を引用した。
- 4) 方言概説書および辞典の記述をみると、ヤルの語源については、アル説(前田1949, 榎垣1962, 山本1962), オル説(牧村1955), ハル説(榎垣1948)に分かれている。藤原与一1978でもこの問題に言及があり、アル説が支持されている。本稿では語源の問題には立ち入らないこととする。
- 5) 第三者待遇の「近所の年下」は36例, 「弟か妹」は13例, 出現していた。「近所の年上」と「父親」にも1例ずつヤルが出現していたが、ここでは例外と見なし、×とした。
- 6) 談話8のAとB, 談話9のAについては、大阪府とのみ記されている。この3人が摂津方言域あるいは北・中河内方言域で言語形成期を過ごした可能性もある。
- 7) 小説においてヤルの使用頻度が低いのは、ヤルが同じ関西方言のなかでも、近畿中央部の一部でしか使われない語形であるために、全国の読者層の理解のしやすさを考えて使用が避けられた、という可能性も考えられる。しかし、近畿中央部とその他の西日本地域でニュアンスの異なるヨル形式はとくに避けられていないことから、果たして全国読者の理解しやすさとその語形の使用頻度とが関わりがあるかどうかは明らかではない。
- 8) 例文(3)(4)は、小谷博泰2009を参考にして見つけたものである。

参 考 文 献

- 榎垣実「京阪方言比較考」『温古志叢書』第4編, 土俗趣味社, 1948年, 4-32頁
- 榎垣実「近畿方言総説」榎垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂, 1962年, 5-59頁

- 榎垣実「ダス・ヨル・ヤル——大阪弁源流考——」『研究論集』9（関西外国語短期大学），1964年，1-11頁
- 岸江信介・中井精一『地域語資料1 京都～大阪間方言グロットグラム』近畿方言研究会，1994年
- 岸江信介「京阪方言における親愛表現構造の枠組み」『日本語科学』3，1998年，23-46頁
- 岸江信介・中井精一・鳥谷善史『大阪府言語地図』近畿方言研究会，2001年
- 郡士郎「大阪方言の特色」、『大阪府のことば』明治書院，1997年，11-61頁
- 小谷博泰「関西のことばと文化——小説・詩・落語・マンガ・映画——」『甲南大学紀要 文学編』158号，2009年，1-22頁
- 真田信治・井上文子・高木千恵『関西・若年層における談話データ集』文部省科学研究費成果報告書，1999年
- 田原広史・村中淑子『東大阪市における方言の世代差の実態に関する調査研究 2——待遇表現——』平成9・10年度東大阪市地域研究助成金研究成果報告書，2002年
- 中井精一「関西共通語化の現状——大阪型待遇表現形式の伝播をめぐって——」『阪大日本語研究』4，1992年，17-32頁
- 中井精一「西日本言語域における畿内型待遇表現法の特質」『社会言語科学』5-1，2002年，42-55頁
- 西尾純二「大阪府を中心とした関西若年層における卑語形式「ヨル」の表現性——関係性待遇と感情性待遇の観点からの分析——」『社会言語科学』7-2，2005年，50-65頁
- 藤原与一『昭和日本語方言の総合的研究 第一巻 方言敬語法の研究』春陽堂，1978年
- 前田勇『大阪弁の研究』朝日新聞社，1949年
- 牧村史陽『大阪方言事典』杉本書店，1955年
- 牧村史陽『大阪ことば事典』講談社，1979年（文庫化1984年）
- 宮治弘明「近畿方言における待遇表現運用上の一特質」『国語学』151，1987年，38-56頁
- 宮治弘明「近畿方言の待遇表現について」『国語学会昭和63年春季大会要旨』1988年，71-77頁

大阪方言の助動詞「ヤル」の使用条件について

宮治弘明「近畿中央部における人を主語とする存在表現の使い分けについて
——アンケート調査からみた若年層の実態——」『阪大日本語研究』2, 1990
年, 83-105頁

宮治弘明「方言敬語の動向」小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎編『方言の現在』
明治書院, 1996年, 283-296頁

八亀裕美「大阪を舞台とする小説による調査について」工藤真由美編『方言に
おける動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究 No. 1』大阪大学大学院文
学研究科（科学研究費成果報告書）, 2002年, 339-343頁

八亀裕美・木岡智子「大阪（小説用例）編」工藤真由美編『方言における動詞
の文法的カテゴリーの類型論的研究 No. 5（大阪（小説用例）編）』大阪大
学大学院文学研究科（科学研究費成果報告書）, 2003年, 49-148頁

山崎久之『国語待遇表現体系の研究 近世編』武蔵野書院, 1963年

山崎久之『続 国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院, 1990年

山本俊治「大阪府方言」榎垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂, 1962年,
425-494頁

和田実「大阪」『方言学講座第三巻 西部方言』東京堂, 1961年, 151-181頁